

イテリス「醜」

—— 日本靈異記の訓釈と片仮名ホの異体字 ——

蜂 矢 真 郷

『時代別国語大辞典上代編』（以下、『上代編』と示す）に、「いてりす「醜」（動サ変）」の項がある。「顔があかくなる。「謬」注口伝、睽、媿、忝、慮、醜（イテリシ）耳熱」（靈異記中序）【考】「醜」は酔って顔の赤くなることをいうが、ここは恥ずかしさに顔のあからむ意。高野本のみにある例で多少存否が疑われる。」（全文）と記される。

日本靈異記・中巻序の当該部分は、日本古典文学大系70『日本靈異記』（岩波書店 以下、『旧大系』と示す）には「口傳を謬り注す。睽みて媿ぢ、慮に忝ク、顔醜リシ耳熱し。」と訓読されている（訓釈を最も重視していると見られるので、旧大系を見る）。国会図書館本（『上代編』には「高野本」とある）の訓釈には、「醜（イテ／リシ）」（山括弧内は小字を、斜線は改行を示す、以下同様）とある。旧大系の脚注に「攷云「イ疑ホ」とあるように、江戸時代の狩谷椽齋『日本靈異記攷證』に「前田氏曰／イ疑ホ」とある（「イ疑ホ」はホの異体字）。旧大系の頭注には、「恥しさの余り顔が赤くなり、耳たぶもほてるのを感じる。「醜」（醜）と通用）は、玉篇「飲酒朱顔顔貌」、名義抄アカシ。訓釈イテリシは、ホテリシの誤りであろう。オモホテルは、新撰字鏡「喟・喟然」にあてる。」として、下巻第四縁の「目漂青カニ、面赫然シテ（赫然（ニ合於毛／保天リシ天）を参照せよとする。下巻第四縁の訓釈は前田本によったが、真福寺本の訓釈には「赫然（ニ合於無日天／利シ天）」とあって、この「無」は「母」に近い字体であり、「日」については後に述べる。

ここに、最も大きい問題はイテリシかホテリシかであるが、旧大系の校注者の一人である遠藤嘉基氏が、(一)「金剛三昧院本「日本靈異記」の訓釈仮名について」（『日本靈異記訓釈攷』[1982.5 和泉書院]、もと「高野山大学国語国文」2 [1975.12]）に述べられるように、大唐西域記（興聖寺本、947-956）、漢書楊雄伝（武居巧氏蔵、948）、大慈恩寺三蔵法師伝（興福寺本、1116）に、萬葉仮名「保」の略体である片仮名「イ」がホの異体字としてあることが知られていて、ホテリシと訓む（「顔醜」をオモホテリシと訓む）のがよいと考えられる。

『上代編』に「高野本のみにある例」とあるが、中巻の底本である真福寺本には訓釈が全くないので、それは致し方ないところである。その後一九七二―七三年の調査で発見された来迎院本に「醜」とあること、遠藤氏(二)「来迎院本「日本靈異記」序文の訓釈について」（前掲書、もと「大谷女子大國文」9 [1979.3]）に示されている。アテリトのアは、萬葉仮名「保」の略体である片仮名「早」（ホ）がアになったものと見られ、同じくトは、萬葉仮名「止」が片仮名トになるか同シになるかの問題であること、遠藤氏(二)が述べられ

